

下総国印播郡言美郷を考える

糸川道行

はじめに

2010（平成22）年度に筆者は財団法人千葉県教育振興財団の業務として、印西市大森に所在する曾谷窪遺跡の発掘調査・整理作業をおこなった¹⁾。その際、まとめの一つとして曾谷窪遺跡周辺における奈良・平安時代の様相についての記載を考えたが、整理期間内では終えることができなかつたため、報告書への掲載をあきらめた。

本稿はこのことについてあらためて稿を起こしたものである。その目的をより具体的に述べるならば、曾谷窪遺跡が所在する古代下総国印播郡言美郷を考察することにより、奈良・平安時代における印播郡の集落研究を進めることである。

「いんば」の歴史的名辞は「印播」のほかに、承平年間（931～937年）に成立した『和名類聚抄』（以下『和名抄』とする）²⁾で使用された「印幡」や墨書文字に「印波郡」の資料もあるが³⁾、広範に使用された「印播」を主として使用する⁴⁾。なお現代の行政名・組織名や地名等については「印旛」を使用する。

1 曾谷窪遺跡周辺における古墳時代終末から平安時代の主要な遺跡（第1図）

曾谷窪遺跡（第1図1）は現在の地形で、利根川の沖積地に延びる標高25m前後の舌状台地に立地する。1992（平成4）年に（財）印旛郡市文化財センターによって調査が実施され、奈良・平安時代の遺構として、堅穴建物1棟、鍛冶炉2基、木炭窯1基が検出された。出土遺物からみた堅穴建物の歴年代は9世紀後葉～10世紀前半頃である。鍛冶炉および木炭窯については、良好な土器の出土がなく、詳細な時期は不明瞭である。鍛冶炉については精錬鍛冶から鍛錬鍛冶まで行われており⁵⁾、木炭窯も鍛冶に関わるものである。後述する曾谷ノ窪瓦窯の存在と合わせて、同一地点で瓦生産・鉄生産が行われたことがわかった。

曾谷窪遺跡の立地する台地西方は北方の低地から延びる支谷であるが、この支谷は台地の南側にまわりこ

んでいる。曾谷ノ窪瓦窯（第1図1）はその支谷の奥まった南斜面に立地する。1979（昭和54）年に学術調査が実施され、瓦窯2基（1号・2号瓦窯）、灰原1か所（3号瓦窯灰原）、炭窯3基が確認された⁶⁾。瓦窯南方の支谷は東方にまわりこんでいるが、埋め立てられており、瓦窯の存在は不明である。瓦窯で焼成された瓦は南東750mの地点に位置する木下別所廃寺（第1図3）に供給されたものである。

印西市教育委員会は曾谷ノ窪瓦窯の隣接地点に開発計画があつたため、2000（平成12）年に確認調査を実施した。その結果、堅穴建物12棟・土坑3基が確認されたが、瓦窯や炭窯は検出されなかつた。確認された遺構のうち斜面に位置する奈良・平安時代の堅穴建物1棟と土坑3基については現状保存ができないため、印旛郡市文化財センターによって2002（平成14）年に発掘調査が行われ、曾谷ノ窪瓦窯跡（第2地点）として報告された⁷⁾。土坑3基のうち1基（1号土坑）からは遺物の出土がなかつたが、残る2基（2・3号土坑）からは多量の鉄滓が出土し、特に3号土坑の出土量は総量54kgにおよぶものであつた。歴年代は、2号土坑が8世紀末頃、3号土坑が9世紀後半である。1992年の調査に引き続き製鉄関連遺構・遺物が検出された。

2010（平成22）年、県道千葉竜ヶ崎線の改良事業に伴って、曾谷窪遺跡の一部が発掘された⁸⁾。調査地点は曾谷ノ窪瓦窯北方の台地上および緩斜面である。奈良・平安時代の確実な遺構は、堅穴建物4棟と土坑1基である。堅穴建物のうち1棟は横長の方形を呈し、前側の両隅部からは大きな土坑が検出された。堅穴内からは鉄滓が出土し、また、若干の焼土も分布しており、鍛冶関連の堅穴建物であることがわかった。ほかの堅穴建物からも鞆の羽口や鉄滓が出土しており、これまでの調査と同様に、鍛冶関連の遺構・遺物が出土した。しかし瓦窯関連の遺構は検出されず、少量の瓦片が出土しただけである。なお、調査では弥生時代の堅穴建物も5棟検出されている。そのため、印西市が確認した堅穴建物も奈良・平安時代のものだけではな

く、弥生時代のものを含む可能性がある。

木下別所廃寺は瓦葺きの古代寺院で、創建年代は7世紀後葉である⁹⁾。下総における初期寺院の一つであり、印旛沼・手賀沼周辺では栄町龍角寺に次いで古い。軒瓦の瓦当文様は飛鳥山田寺の系譜を引く龍角寺式のものである。3基の基壇が確認され、法起寺式の伽藍配置が想定されているが、塔にあたる3号基壇には瓦塔を設置していた可能性が指摘されている。寺域区画施設は確認されていない。北方および東方に9棟の竪穴建物が検出されており、周囲に密度の濃い集落が展開するとみられる。なお、1棟の竪穴建物から平城Ⅲ期の畿内産土師器高盤が出土した¹⁰⁾。

木下別所廃寺は広大な台地の南縁に立地するが、この広大な台地を占める遺跡が天神台遺跡(第1図2)である¹¹⁾。これまで15次にわたる調査が実施され、奈良・平安時代の竪穴建物が約80棟、掘立柱建物約20棟が検出されている。調査された面積は台地の一部であり、竪穴建物・掘立柱建物ともに膨大な数量を包蔵していることが確実である。曾谷窪遺跡周辺の遺跡のなかでは最大規模の拠点的な集落遺跡である。調査地点のうち第5地点(天神台呑内遺跡)は遺構の分布密度が高く、その周辺から木下別所廃寺周辺にかけての台地南側に集落の中心部があるものと予想されている¹²⁾。

曾谷窪遺跡は、天神台遺跡が立地する台地の北西側に位置する。曾谷窪遺跡の南西側は曾谷ノ窪瓦窯が立地する支谷によって天神台遺跡とある程度の区切りをもつ。一方、曾谷窪遺跡の南東側は天神台遺跡の台地上平坦面にそのまま続いている。

ここで、曾谷窪遺跡周辺の遺跡について時期を若干さかのぼってみる。上宿古墳(第1図4)は終末期古墳で、印西市北部地域を代表する古墳の一つである¹³⁾。埋葬施設は貝化石岩の切石を積み上げた横穴式石室であるが、墳丘は後世の改変により当時の姿をとどめていない。そのため、2007(平成19)年に墳形を確認する目的で調査が行われたが、周溝は検出されず、墳形は今も明らかでない。しかし、貝化石岩の横穴式石室をもつ古墳は方墳が多く、上宿古墳も方墳の可能性が高い。近隣地域には上宿古墳の他にも、貝化石岩や貝を含む砂岩を用材とする古墳がいくつか存在するが、本稿では詳細な記述を省略する。上宿古墳の築造年代については、埋葬施設が前方後円墳消滅後の方墳のものであることから、7世紀代と推定されている。上宿古墳と同様の埋葬施設をもつ古墳としては、東日本最大の方墳である栄町竜角寺岩屋古墳などがある。古墳

築造に際して竜角寺地域から印西市北部周辺地域への指導や協力が存在した。その関係は、木下別所廃寺が龍角寺式の瓦をもつことからその後も続いている。

上宿古墳・木下別所廃寺・曾谷ノ窪瓦窯等のあり方から、この地域には古墳時代終末期頃からかなりの力をもつ集団が存在したことがわかる。そして、その集団は龍角寺や竜角寺古墳群を造営した集団と深い関わりをもつ。

大畑遺跡(第1図5)は曾谷窪遺跡西方の台地に所在する遺跡で、奈良・平安時代の竪穴建物3棟と奈良・平安時代とみられる掘立柱建物1棟が検出されている¹⁴⁾。調査面積は少なく、周囲に集落が広がることが予想される。

下宿遺跡(第1図6)も曾谷窪遺跡西方の台地に所在する遺跡で、曾谷窪遺跡と大畑遺跡の間に位置する。奈良・平安時代の竪穴建物1棟が検出されている¹⁵⁾。

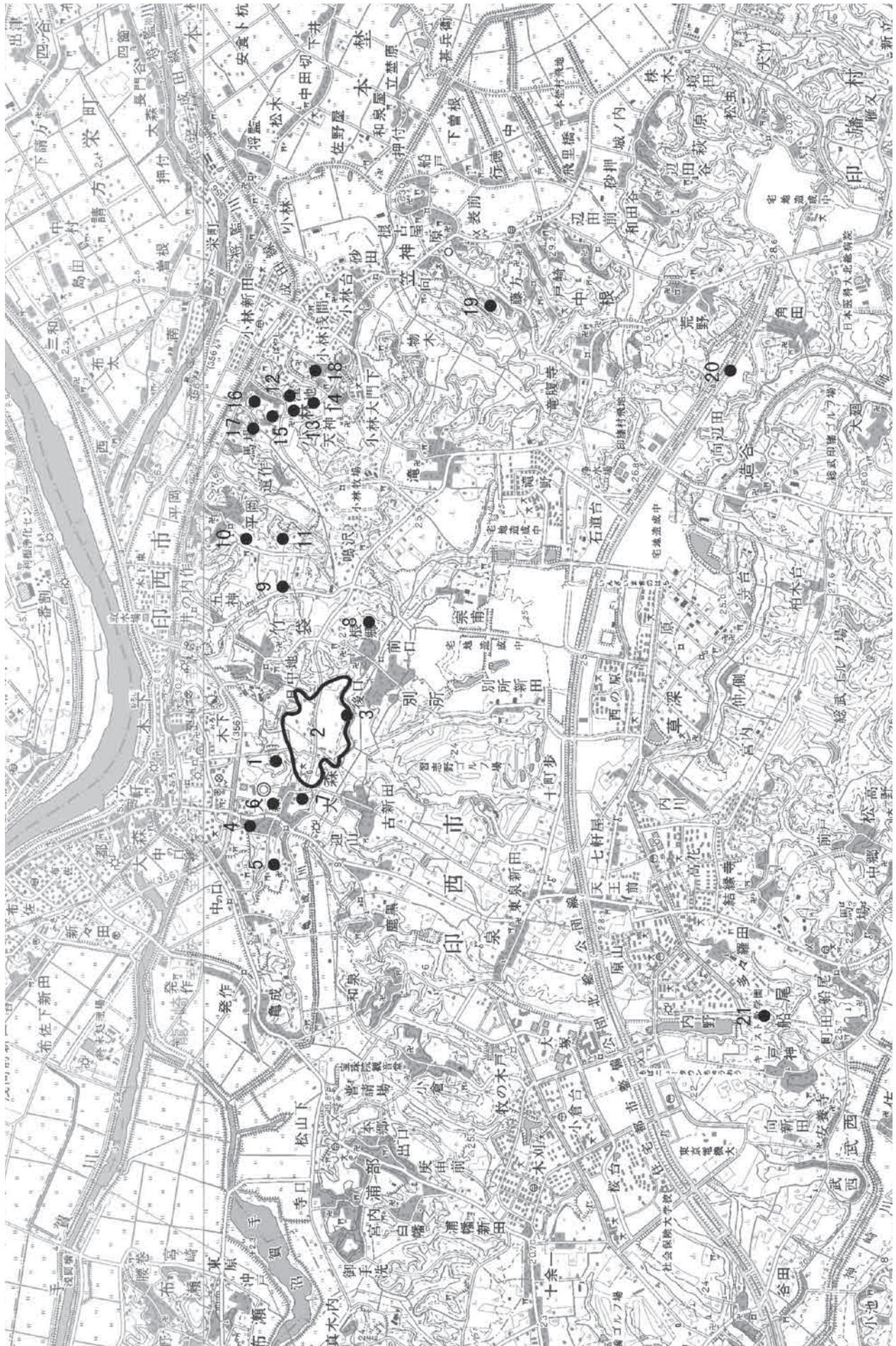
八夜台遺跡(第1図7)は天神台遺跡と接してその西方に位置する遺跡である。平安時代の竪穴建物1棟が検出されている¹⁶⁾。天神台遺跡との間には南側から支谷が入り込んでいるが、北側は地続きであり、広くみれば、天神台遺跡の一部である。

曾谷窪遺跡の東方では、天神台遺跡の東やや南に池ノ下遺跡(第1図8)が位置しており、奈良・平安時代の竪穴建物14棟・掘立柱建物10棟・鍛冶炉1基等が検出された。遺構の分布はあまり密ではないが、「下総国埴生郡酢取郷車持□…□曆二年正月十四」と記載された長文墨書土器が出土した。地名、氏族名、年号・月日がわかる点で、重要な資料である¹⁷⁾。

天神台遺跡東方で比較的近距离に所在する奈良・平安時代の遺跡をあげると、池ノ下遺跡以外に以下のものがある。

稲荷峠遺跡(第1図9)¹⁸⁾ 東遺跡(第1図10)¹⁹⁾
馬込遺跡(第1図11)²⁰⁾ 駒形北遺跡(第1図12)²¹⁾
駒形西遺跡(第1図13)²²⁾ 駒形南遺跡(第1図14)²³⁾
馬場遺跡(第1図15)²⁴⁾ 花作遺跡(第1図16)²⁵⁾ 花作西遺跡(第1図17)²⁶⁾ 天神前遺跡(第1図18)²⁷⁾

このうち、駒形北遺跡・駒形西遺跡・駒形南遺跡・馬場遺跡・花作遺跡・花作西遺跡は遺跡名が細かく分かれているが、広大な同一台地上で隣接関係にあり、一つの遺跡にくくることができる²⁸⁾。駒形北遺跡や馬場遺跡の様相をみると、集落は古墳時代後期から開始しているが、竪穴建物群の分布密度は高く、掘立柱建物もかなりの棟数が存在する。印西市小林地域における古墳時代後期から平安時代におよぶ拠点的な遺跡で



第1図 曾谷窪遺跡・天神台遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/50,000)

- 1 曾谷窪遺跡・曾谷ノ窪瓦窯跡
- 2 天神台遺跡
- 3 木下別所廃寺
- 4 上宿古墳
- 5 大畑遺跡
- 6 下宿遺跡
- 7 八夜台遺跡
- 8 池ノ下遺跡
- 9 稲荷峠遺跡
- 10 東遺跡
- 11 馬込遺跡
- 12 駒形北遺跡
- 13 駒形西遺跡
- 14 駒形南遺跡
- 15 馬場遺跡
- 16 花作遺跡
- 17 花作遺跡
- 18 天神前遺跡
- 19 宮内遺跡
- 20 角田台遺跡
- 21 船尾白幡Ⅱ遺跡

ある。また、天神前遺跡は駒形北遺跡からは小さな谷を介して東方に位置する遺跡である。狭小な台地に立地するが、堅穴建物の分布密度は高い。

印西市平岡に所在する馬込遺跡は堅穴建物・掘立柱建物の分布密度があまり高くないが、七重塔に復元された瓦塔2基が出土した。

以上のように曾谷窪遺跡・天神台遺跡から東西に延びる台地には、奈良・平安時代の集落が広く分布している。

この台地の南方には東西に延びる支谷があり、亀成川が東から西に流れて手賀沼に注いでいる。亀成川南岸の台地上にも遺跡の分布がみられるが、調査例が少なく、奈良・平安時代の集落の様相は不明瞭である。

2 印播郡各郷の比定地

奈良・平安時代における下総国には、国府が所在する葛飾郡を筆頭に11の郡がある。印播郡はそのなかの一つであり、下総国の中央部に位置する郡である。郡の下位の行政単位としては郷（霊亀元（715）年以前は里）があり、『和名抄』では、印播郡に属する郷が11郷記載されている。

印播郡の各郷を『和名抄』の記載順に記述すると以下のとおりである。

八代 印幡 言美 三宅 長隈 鳴（鳥）矢 吉高
船穂 日理 村神 餘戸

本篇の主要な対象である言美郷はこの11郷のなかの一つである。「言美」の読みについては不詳であるが、「ことみ」または「とみ」と読むのであろう。

印播郡の各郷は、現在まで残る地名からその比定地を推測できる場合が多い。郷名と地名との対応関係を列挙すると以下のとおりである。

八代郷…成田市八代 長隈郷…佐倉市長熊 吉高郷…印西市（旧印幡村）吉高 船穂郷…印西市船尾 村神郷…八千代市村上 餘戸郷…佐倉市天辺

三宅郷については、御倉^{みやけ}→小倉と変化したとすると、印西市小倉周辺に比定できる。鳴（鳥）矢郷については、「鳴矢」は鎗矢のことであるので、佐倉市鎗木周辺が比定地である。さらに日理郷については、「日」が「白」に転訛し、「理」が「井」に転訛したとすると、佐倉市白井周辺が比定地となる。なお「日理」の音は不詳であるが、「日理」の「日」が「亘」であったとすると、「わたり」と読まれていた可能性が高い。なお佐倉市白井の地は印幡沼の渡河点であり、本質的には「渡り」である²⁹⁾。

残る印幡郷・言美郷については大字の地名からの類推ができない。「印播（印幡）」については郡全体の名称であり、現代の地名では郡名のほか、旧印幡村に名称をとどめているが、地名だけでは狭い範囲に絞ることができない。

そのため、この両郷については別方面から考える。まず、印播郷については、酒々井町酒々井周辺地域を比定する。この地域は印幡沼にも古東海道にも近く、陸上交通・水上交通双方の要衝である。印播郡家は現在までのところ発掘調査によって明らかになっていないが、この地域周辺に存在すると考える。そして、印播郡家の所在地周辺に郡名と同名の印播郷も比定できると考える。

この地域は長隈郷と八代郷の間であるが、印幡沼南岸から東岸にかけては奈良・平安時代の遺跡が多く分布しており、各郷が比較的狭域で連続している。印播郷もそのような郷の一つであり、長隈郷と八代郷の間に置くことが妥当である。

言美郷の「とみ」は「とりみ」すなわち「鳥見」である。この「鳥見」で想起されるのは鳥見神社であるが、千葉県内に所在する鳥見神社の分布域は手賀沼周辺から北印幡沼西岸地域に及んでいる。その分布域は「鳥見郷（里）」＝「言美郷」の比定地を示唆する³⁰⁾。なお、「鳥見」から「言美」への変化は好字への転換と考える³¹⁾。

また、山路直充氏は『和名抄』における各郷の記載について、隣接する二郷が続けて記載される場合があることを指摘している。印播郡の場合は、最初の八代郷と次の印幡郷が隣接する二郷であり、三番目の言美郷は四番目の三宅郷と隣接すると考察している³²⁾。五番目以下の郷については記述を省略するが、この見解については他郡他郷の事例からも肯定できると考える。三宅郷は印西市小倉周辺が比定地であるので、言美郷は印西市小倉周辺に近い地域に所在する郷である。

しかし、印西市別所に所在する池ノ下遺跡の発掘調査により、言美郷の郷域および印播郡・埴生郡の郡域比定に波紋が生じているため³³⁾、次項でこの問題を取りあげる。

3 言美郷の郷域比定について

言美郷について『下総国旧事考』は、『常陸国風土記』行方郡条で、景行天皇が行方郡を眺望した「下総の国印波の鳥見丘」の記述から、その関連性を指摘している。そして、印播郡内で行方郡を眺望できる場所として、印西市平岡・小林を含む地域をあげている³⁴⁾。こ

の見解は山路氏の論考や最新の研究成果である『下総国戸籍』にも引き継がれ、また、近年では戸谷敦司氏が考察している³⁵⁾。平岡の西方は印西市竹袋・大森の台地が地続きで延びており、それらも言美郷の範囲内とすることができる。この台地の南方には亀成川が東から西に流れて手賀沼に注いでいるが、亀成川の南方は三宅郷とする山路氏の見解にしたがう³⁶⁾。

印西市小林の東方・南方では、宮内遺跡（第1図19）が古墳時代後期から平安時代におよぶやや大規模な集落である。宮内遺跡は印西市（旧本埜村）中根に所在し³⁷⁾、天野努氏は言美郷の中核的な集落の一つとしている³⁸⁾。この遺跡について、筆者は言美郷の郷家集落の近辺に位置する遺跡ではないと考えるが、言美郷内の遺跡であるという点では、天野氏の見解にしたがう。そうすると、小林と中根の間に所在する印西市滝・物木・竜腹寺なども言美郷の範囲内となる³⁹⁾。

大森から小林にわたる台地の北方は低地であり、通常は葦原が広がり、霞ヶ浦に至る小河川が存在した。その北方の台地の一部、蛟蛸神社が所在する茨城県北相馬郡利根町立木付近の台地は相馬郡布佐郷の範囲内であるが、そこからさらに北方の台地は常陸国側の郡郷である。

以上が言美郷の郷域に関する筆者の理解であり、それはこれまでの一般的な理解とあまり変わらないと考える。

しかし、この理解では言美郷の範囲内にある池ノ下遺跡の3号竪穴建物から出土した土師器甕に、「下総国埴生郡酢取郷…」という墨書文字が記されていたことから、池ノ下遺跡が所在する印西市別所付近を埴生郡酢取郷の範囲内とする可能性が指摘されている⁴⁰⁾。

報告書中で上記の可能性を提示した加藤貴之氏はその後、「印西市東部が埴生郡域であった可能性も強まっている」として、含みを残しながらも、より埴生郡説に積極的な姿勢を示している⁴¹⁾。また、石戸啓夫氏は論文の図中で池ノ下遺跡周辺を酢取郷と記載しており⁴²⁾、これも印西市東部を積極的に埴生郡酢取郷と認める見解である。

しかし、印西市別所周辺を埴生郡酢取郷とすると、印播郡言美郷の郷域はどのように考えられるのだろうか。別所周辺が酢取郷の場合、印播沼北側の東西が埴生郡となる。したがって、池ノ下遺跡の東方に言美郷を比定するのは埴生郡を分断することになるため、ありえない想定である。逆に池ノ下遺跡の西方に言美郷を比定した場合、言美郷の郷域は非常に狭いものにな

る。はたして言美郷の郷域はそれほど狭いものなのであろうか。

川尻秋生氏は印播沼西方の郷は、印播沼東岸・南岸の地域に比べて郷域が広いことを指摘している。その理由として、印播郡西部は東部・南部よりも開発が遅れたことをあげている⁴³⁾。里（郷）が設定されたとき、人口密度が高い地域には狭域の郷が設定され、人口密度の低い地域には広域の郷が設定されたのである。

言美郷は『常陸風土記』の景行天皇巡幸伝説や三宅郷との関係から、印播沼北西方に所在することは確実である。川尻氏の指摘する歴史的経緯からは、言美郷が狭域であることは考えがたい。

したがって、池ノ下遺跡の所在地周辺も言美郷の範囲内であり、郷域は『下総国戸籍』に代表される一般的な見解が妥当と考える。

では、なぜ池ノ下遺跡から「埴生郡酢取郷」の墨書土器が出土したのであろうか。これまでもみてきたように言美郷の東方には埴生郡が位置し、西方には相馬郡が位置する。延暦24（805）年、東海道は下総国府周辺から相馬郡を通過して常陸国府周辺に向かうルートに付け替えられる。その場合、埴生郡北側の地域から下総国府や京に向かうには、南に向かって印播郡家周辺から千葉郡を経て下総国府に至るよりも、西に向かって相馬郡を経て下総国府に達する方が近いルートとなり、後者の方が前者よりも利便性が高い。埴生郡北側から下総国府に向かうにあたり、もっぱら相馬郡を経由するコースが採られたならば、そのコースは言美郷を通行することとなる。

「埴生郡酢取郷」の墨書はこのような埴生郡と相馬郡との交通関係のなかで理解できるものと考えられる。なお、このような交通関係は延暦24年に至って初めて発生したのではなく、それ以前から存在したと考える。

土器に記入された地名が必ずしもその出土遺跡の場所でないことは、加藤氏が指摘するとおり、印西市（旧本埜村）角田台遺跡（第1図20）の事例からもうかがえる⁴⁴⁾。角田台遺跡では「逆瑳郡物部黒丸…」と書かれた墨書土器が出土しているが、角田台遺跡は明らかに印播郡内の遺跡である。

池ノ下遺跡の集落が印播郡言美郷内の集落とすると、広域である言美郷の開発にあたっては、埴生郡を本貫とする氏族が関与した可能性があり得る⁴⁵⁾。言美郷の地域と埴生郡地域との関係は、先述した上宿古墳と竜角寺古墳群、木下別所廃寺と龍角寺との関係から、少なくとも飛鳥時代からうかがえ、また、中世において

も印西市大森に所在する長楽寺の梵鐘に「埴生西」と刻まれていることから、下の時代にも続いている。

なお、酢取郷の「酢取」は後に「羽鳥」に転訛したものであり、その比定地については成田市北部の羽鳥付近にあてられる見解がこれまで一般的である。

その場合、酢取郷は東方の埴生郡麻在郷と近すぎ、また、それほど密度の濃い古代集落が検出されていないことから、その比定に疑問をもつ考えが提示されている⁴⁶⁾。

それが池ノ下遺跡周辺を酢取郷とする理由の一つであるが、従来の考えによる両郷は現在まで広域な開発が行われている地域でないことから、密度の濃い古代集落はまだ両郷の地下に存在すると考える。

両郷は埴生郡家に近い地域であり、古墳時代後期から活発な開発が進められた伝統的な地域であることから、狭域であると考えられる。

ところで、これまでみてきた酢取郷の問題とは別に、木下別所廃寺や天神台遺跡を三宅郷の中心地域とする見解がある⁴⁷⁾。

しかし、この見解についても言美郷の郷域をどう考えるのかという問題が生じる。三宅郷は印西市小倉を遺称とし、『下総国戸籍』によれば、西は現在の白井市・柏市(旧昭南町)境である金山落まで含まれるため⁴⁸⁾、天神台遺跡が所在する印西市大森周辺まで含めると、非常に広域な郷となる。

その場合、言美郷は狭域となり、歴史的な経緯から問題がある。やはり、印西市大森周辺については言美郷の範囲内とする方が、郷の広さだけでなく、地理的にも妥当と考える。

4 言美郷の中心的な集落について

奈良・平安時代の集落遺跡の研究は、1990年代頃から一般的な集落遺跡とはいいがたい遺跡の研究が進展してきた。それらは規格的な配置をとる掘立柱建物群や官衙的な遺物をもつ遺跡であるが、その性格については、郷(里)家、有力者の居宅(館)、庄所、郡家別院、郡家の出先機関・支所などが指摘されている⁴⁹⁾。

房総でもそのような遺跡の存在が明らかになってきた。ここでは言美郷以外の他の郡郷のうち、比較的近いところに所在する遺跡について、主として遺構の様相をとりあげ、それらのあり方から言美郷の中心的な遺跡を考える。

奈良・平安時代における有力者が居住した遺跡として、千葉郡内の遺跡であるが、まず、四街道市小屋ノ

内遺跡をとりあげる。小屋ノ内遺跡について簡潔に記すと、検出された掘立柱建物群は「コ」の字形配置をとり、なかには総柱の倉庫群が存在する。掘立柱建物群の近くには大型の堅穴建物もみられ、やや離れた斜面際には井戸状遺構または氷室といわれる大型円形土坑が存在する。また台地先端には村落寺院が存在する⁵⁰⁾。

八千代市上谷遺跡も小屋ノ内遺跡と類似する内容であるが、「コ」の字形配置の掘立柱建物群が二群である点で、小屋ノ内遺跡よりも重厚な構えである⁵¹⁾。

佐倉市高岡大山遺跡は膨大な数量の堅穴建物・掘立柱建物が検出された遺跡である。掘立柱建物の多くが規格的な配置をとり、そのあり方も雁行状、「コ」の字形、主殿・脇殿風など多様である⁵²⁾。

成田市台方下平Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡や大袋腰巻遺跡・大袋小谷津遺跡などの公津東遺跡群でも多くの掘立柱建物が検出され、規格的な配置をとるものもみられる。双方とも倉庫と思われる総柱の建物が検出され、倉庫群が列状となるところもみられる⁵³⁾。

印西市船尾白幡Ⅱ遺跡(第1図21)は調査面積があまり多くないが、掘立柱建物群は「コ」の字形配置をとると推定されている⁵⁴⁾。

四街道市南作遺跡からは「山梨郷長 坏 大生部直 罌麻」と書かれた墨書土器が出土した。堅穴建物と掘立柱建物は比較的多く検出されたが、掘立柱建物群はあまり規格的な配置ではない⁵⁵⁾。

酒々井町飯積原山遺跡は「庄」の墨書や遺構の様相から、初期荘園遺跡と考えられるが⁵⁶⁾、この遺跡については後述する。

飯積原山遺跡を除くほかの遺跡は郷家集落の可能性が高いか、その候補の集落である。それらの遺跡と郷との対応関係は以下のとおりである。

小屋ノ内遺跡…千葉郡物部郷 上谷遺跡…村神郷 高岡大山遺跡…長隈郷 台方下平Ⅰ・Ⅱ遺跡・大袋腰巻遺跡・大袋小谷津遺跡…八代郷 船尾白幡Ⅱ遺跡…船穂郷 南作遺跡…千葉郡山梨郷

このうち、高岡大山遺跡はその内容から長隈郷の郷長が所在したというだけでなく、印播郡衙を補完するような官的機能があり、印播郡の郡領氏族が集住した遺跡の一つと考える。

八代郷内には台方下平遺跡群と公津東遺跡群という複数の遺跡群が存在しているが、どちらが郷家集落であるか断定しがたく、将来の研究の進展に委ねる。なお、大袋腰巻遺跡では「丈部直」の墨書土器が出土し

ており⁵⁷⁾、この遺跡も印播郡の郡領氏族が存在した可能性が高い。

郷長等の有力者が存在する遺跡として筆者が最も重視するのが、規格的配置の掘立柱建物群の存在である。それらは官衙風建物群とも呼ばれており⁵⁸⁾、なかでも「コ」の字形配置は国府や郡家の建物群の配置を模倣したものとして、特に重視する要素である。

そのような観点からすると、南作遺跡は「山梨郷長」の墨書が出土した点で最も直接的であるが、掘立柱建物群に規格的な配置がみられない点で、郷家集落として断定できるか若干の懸念がある。「山梨郷長」の墨書土器は小規模な竪穴建物から出土したものである。近くに掘立柱建物はあるが、3間×2間の側柱建物で、郷長が居住するような格の高い建物とは思えない。郷長は郷内の各集落を巡回したはずなので、郷長の居住集落以外に痕跡が残ることはあり得ると考える⁵⁹⁾。

「通瑛郡」の墨書土器をみても、遺物は可動性があるので、根拠としては遺構に比べ弱い。山梨郷が物部郷と対となる郷であるならば、別に規格的配置の掘立柱建物群をもつ遺跡が存在する可能性がある。南作遺跡は山梨郷長が所在した可能性がある有力な遺跡ではあるが、本稿では別の遺跡が存在する可能性を排除しないでおく。

以上の遺跡のほかにも、佐倉市白井に所在する江原台遺跡は日理郷内の拠点的な遺跡であり、掘立柱建物も多く存在する。郷家集落の可能性はあるが、整然とした規格的配置の掘立柱建物群がみられない点で、断定できるか若干の懸念がある。ここでは可能性の指摘にとどめ、結論を保留する⁶⁰⁾。

また、佐倉市六崎大崎台遺跡も規格的配置の掘立柱建物群をもつ可能性があり、谷津をはさんで対岸に位置する寺崎向原遺跡とともに鳴（鳥）矢郷内にある有力な遺跡であるが、竪穴建物群との関係が不明瞭である。これも今後の検討課題とする⁶¹⁾。

村神郷内の遺跡である八千代市白幡前遺跡や村上込ノ内遺跡も奈良・平安時代の拠点的な遺跡であるが⁶²⁾、規格的配置をもつ掘立柱建物群のあり方の点で、上谷遺跡を郷家集落と考える。

さらに、この判断を補強するものとして、上谷遺跡など保品・神野地域の遺跡群の方が萱田遺跡群よりも印旛沼に近いという交通上の優位性をあげる。

佐倉市内田端山越遺跡は印播郡南部の余部郷に属するか千葉郡山梨郷に属するか、断定しがたい。奈良・平安時代における有力な遺跡の一つであるが、須恵器

窯をもつ点で、単なる集落遺跡ではない。竪穴建物等のあり方は散在的で、郷の中心集落とするには、他遺跡と比べ、見劣りがする。しかし、余部郷の場合はこのような景観であるのかもしれない⁶³⁾。

規格的配置の掘立柱建物群をもつ遺跡を中心に記述してきたが、郷家集落のすべてがそのような掘立柱建物群をもつかどうかは断定しがたい。

栗田則久氏は香取郡山幡郷内と思われる遺跡群について考察し、山幡郷のような伝統的な地域の集落は掘立柱建物の比率が少ないことを指摘した⁶⁴⁾。

ある一定の地域のどこにおいても掘立柱建物が少ない場合は、郷家集落でも同様かもしれない。その場合、郷家集落と一般的な集落の違いはどこにあるのかという永遠ともいえる課題に直面する。今後の検討課題とするが、当面、竪穴建物の棟数が多いこと、大型の竪穴建物が存在すること、交通の要衝上に位置することなどを要素としてあげておく。

さて、ここまでの記述はすべて言美郷内での中心的な遺跡がどこであるのかを考えることにある。言美郷内には印西市小林地域に駒形北・馬場遺跡のような拠点的な集落があるが、周辺遺跡の様相や立地の上で、郷家集落としてふさわしいのは、天神台遺跡と考える。

天神台遺跡は遺跡内に木下別所廃寺が存在するが、木下別所廃寺は先述したように、下総最古の龍角寺に次いで古い。本格的な塔は存在しないが、金堂は瓦葺きの屋根をもつ格の高い寺院である。関連して近隣に木下別所廃寺の屋根瓦を焼成した曾谷ノ窪瓦窯や製鉄関連の遺構が検出された曾谷窪遺跡があり、天神台遺跡周辺は生産遺跡の面からも郷内の中心地域である。

天神台遺跡と駒形北・馬場遺跡を比べると、ともに立地する台地は広大であり、多くの遺構を包蔵している。しかし、その立地をみると、駒形北・馬場遺跡は北方の低地に面するが、亀成川から遠いところが天神台遺跡と異なる点である。

それに比べ、天神台遺跡は、北側では北方の低地、南側では亀成川の支谷と、南北双方の低地に面している。特に亀成川から手賀沼に出ることができるという点で、交通上の優位性は天神台遺跡にあると考える。

ただし、古墳時代後期の集落をみると、駒形北遺跡の方が天神台遺跡よりも密度が濃いようである。駒形北・馬場遺跡の東南方には印西市最大の道作古墳群も存在する。

このような歴史的状況を考慮すると、両遺跡群の経営者はまったくの別集団ではなく、駒形北・馬場遺跡

の集団が天神台遺跡開発の一部を担った可能性を考慮すべきかもしれない。現状では不明瞭であるが、今後は両遺跡群に共通項があるか探る試みが必要である。

ところで、天神台遺跡を三宅郷の中心遺跡とする見解があるが、これについては首肯できない見方を前項で述べた。三宅郷の中心的な遺跡群は、印西市小倉など天神台遺跡からみて西南方の地域に存在すると考える。

天神台遺跡は、周囲に終末期の古墳があるが、基本的には7世紀後半から勃興した新興集落であり、その点では印播郡西方の他郷と類似する。

郷家集落が必ずしも規格的な配置の掘立柱建物群をもつとはいえないかもしれないが、天神台遺跡の場合、これまでの調査からも掘立柱建物は多く見つかっており、官衙風建物群が存在する可能性が高い。その候補地としては、亀成川に近い木下別所廃寺周辺の台地南側地域をあげておく。

本項の最後に初期荘園遺跡をとりあげる。先述したように一般的ではない集落研究の初期段階においても、荘園遺跡の存在は郷家集落などと並んで指摘されていたが⁶⁵⁾、その段階では下総における初期荘園遺跡のあり方は判然としていなかった。

しかし、近年の調査・研究の進展により、下総においても初期荘園遺跡の様相が明らかになりつつある。

流山市思井堀ノ内遺跡を報告した栗田則久氏は、「庄」墨書土器が多量に出土していることから、思井堀ノ内遺跡が初期荘園遺跡であることを指摘し、さらに関東地方を中心とする初期荘園遺跡について考察している⁶⁶⁾。思井堀ノ内遺跡は調査された範囲内では規格的な掘立柱建物群が検出されていないが、5間×2間の大型掘立柱建物がある。集落の時期は8世紀後葉から10世紀前半にわたる。

栗田氏は思井堀ノ内遺跡出土の瓦が流山廃寺から供給されたとみられることを述べ、流山廃寺出土瓦が下総国分寺創建瓦窯から供給されていることから、思井堀ノ内遺跡の荘園開発は下総国分寺の関与が強い可能性を指摘した。

また、「庄」墨書土器や「庄」を含む線刻された遺物が下総国分尼寺・八千代市白幡前遺跡・千葉市観音塚遺跡にみられることを言及した⁶⁷⁾。ただし、思井堀ノ内遺跡を除く3遺跡の「庄」資料はいずれも1点のみの出土である。このうち、「庄」墨書土器を出土した白幡前遺跡D268堅穴建物出土土器群の歴年代は9世紀後葉である。

飯積原山遺跡は下総における初期荘園遺跡の研究を大きく進展させる遺跡であり、報告した木原高弘氏が詳細な分析・考察を加えている⁶⁸⁾。

飯積原山遺跡では長形状となる規格的な掘立柱建物群が検出された。この建物群は溝で区画され、区画内には大型のものを含む堅穴建物が付随している。やや離れたところには村落寺院があり、またかなり離れたところでは地下構造物では明確に区画されない掘立柱建物群・堅穴建物群が検出された。遺跡内では広く溝が検出され、方格の区割りがなされている。遺跡全体としては堅穴建物の分布は散在的である。墨書土器の出土は比較的多く、そのなかに「庄」が4点みられる。集落の時期は8世紀第4四半期から9世紀第3四半期にわたる。

庄所とみられる建物群は9世紀第1四半期に創設され、この時期から9世紀第3四半期まで継続する。「庄」墨書は少数であるが、「三倉」と書かれた墨書土器が多量に出土した。「三倉」は「三宅」のことであり、荘家を意味する言葉である⁶⁹⁾。

酒々井町尾上木見津・富里市駒詰遺跡は飯積原山遺跡からは高崎川をはさんで対岸に位置する遺跡である。検出された遺構の数量は多くはないが、大型掘立柱建物が検出され、二彩碗や多量の緑釉陶器が出土するなど、宮都の雰囲気をもつ遺跡である⁷⁰⁾。集落は8世紀後半から始まる。木原氏は尾上木見津・駒詰遺跡について土着化した王臣貴族の居所であり、荘園開発の主体者と推測している。そして、飯積原山遺跡は彼らもついくつかの経営拠点の一つと理解している⁷¹⁾。

遺構の時期を問わなければ、飯積原山遺跡の様相は、郷家集落とした遺跡の様相とよく似ている。規格的な配置の建物群は「コ」の字形ではないものの、長形状で整然としている。また、建物群には竈家とみられる比較的大型の堅穴建物が付随することや、村落寺院が存在することも共通するあり方である。中枢となる建物群は物資の流通のため台地端部に占地し、谷部の小河川から大きな河川・湖沼に通じる点も共通要素である。

したがって、今後は規格的配置をもつ掘立柱建物群が検出されても、遺跡の性格を見極めるには慎重でなければならない。

初期荘園遺跡の遺構構造が郷家集落と似ているのは、初期荘園遺跡が律令体制の取奪機構を利用しているということと関係するであろう⁷²⁾。これまでのところ、下総における初期荘園遺跡の開始時期は、古くても8

している。それらの土器等の流入に対して下総側からの交換物が存在したはずであるから、そのルートは双方向であった。水上交通の場合、主なルートを言美郷側からみると、北方の低地に存在する乱流する小河川から榎浦流海を経て榎浦駅に向かい、そこで整備した後、再度、霞ヶ浦に入り、常陸国府周辺を目指すというようなルートを想定できる。なお、天神台遺跡周辺から北方の小河川に至るルートを考えると、台地の北側から直接入り込むルートを想定できるが、倉庫群からの物資の運搬を考慮すると、台地南方の亀成川から手賀沼に入り、手賀沼から小河川に入るルートがより重要であると考えられる。

一方、陸上交通路を多く使用する場合は、北方の湿原または賦駅周辺から榛谷駅を経由し、曾祢駅を目指すというルートを想定する。

なお、言美郷北方の低地については、「香取のうみ」から続く広大な水面が広がっていたという写真や図面が流布しているが、山路氏が主張する誇大であるという指摘にしたがう⁷⁵⁾。もちろん、山路氏も述べているように、大雨による洪水や増水時には広大な水面が広がることを否定できないが、通常は湿原であったと考える。今後は、湿原に関わる動植物や水産資源の利用についても考慮すべきである。

とはいえ、水上交通を否定するものではなく、小舟を介しての常陸国側との交流は活発であった。言美郷においても、少なくともある程度の人員は小舟での航行に長じていたと考える。

このようにみえてくると、言美郷から印旛郡家に向かうルートはなるべく多く印旛沼を利用するルートが最も効率的である。しかし、航行の危険もあることから、印旛郡家に向かう、逆に印旛郡家から言美郷に向かうルートについては今後の検討課題とする。

おわりに

本稿で記述した言美郷の郷域に関する筆者の見解は、多くの研究者同様、最も一般的なものであり、最新の研究成果である『下総国戸籍』を超える新知見は特にない。

しかし、埴生郡酢取郷の問題や、天神台遺跡を三宅郷内の遺跡とするなど、異論や揺らぎとも思える見解が存在することから、言美郷を主な視座に据えることもまったく無意味ではないと考え、拙稿を起こした。

今後も言美郷だけでなく、印旛郡や下総国の奈良・平安時代集落研究が進展することを期待する。

最後に、第2図については、わずかに手を加えているが、ほぼ山路直充氏作成の図面を掲載したものである。掲載にあたって、ご快諾のうえ、データを提供していただいた山路氏に感謝申し上げます。また、日ごろご教示をいただいている栗田則久氏や、文献探索のご協力をいただいた橋本勝雄氏についても、ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) 糸川道行ほか 2011『印西市曾谷窪遺跡』（財）千葉県教育振興財団
- 2) 『和名類聚抄』は源順が承平年間（931年～938年）に編纂した書物である。
- 3) 高花宏行・宮文子 1998『公津東遺跡群Ⅲ - 大袋腰巻遺跡-』（財）印旛郡市文化財センター
- 4) 代表的な事例として八千代市上谷遺跡から出土した「下総国印旛郡村神郷…（略）」の長文墨書土器をあげる。
朝比奈竹男 2004『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』-第4分冊- 八千代市遺跡調査会
- 5) 進藤泰浩 1995『曾谷窪遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
- 6) 滝口 宏編 1980『曾谷ノ窪瓦窯跡発掘調査概報』千葉県教育委員会・曾谷ノ窪遺跡調査会
辻 史郎 1998「木下別所廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県史料研究財団
- 7) 小牧美知枝 2002『曾谷ノ窪瓦窯跡（第2地点）』（財）印旛郡市文化財センター
- 8) 注1 糸川ほか2011文献
- 9) 滝口 宏編 1978『木下別所廃寺第一次発掘調査概報』千葉県教育委員会 木下別所廃寺調査会
滝口 宏編 1980『木下別所廃寺第二次発掘調査概報』千葉県教育委員会 木下別所廃寺調査会
および注6 辻1998文献
- 10) 注9 滝口編1980文献
- 11) 天神台遺跡に関わる主要な報告書は以下のとおりである。
宮内勝巳ほか 1987『天神台遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
米田幸雄 1991『天神台・ヤジダ遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
（財）印旛郡市文化財センター 1994『印旛郡市文化財センター年報10-平成5年度-』
（財）印旛郡市文化財センター 1997『印旛郡市文化財センター年報12-平成7年度-』
野村優子 2000『天神台遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
小倉和重 2001『平成11・12年度 印西市内遺跡発掘調査

- 報告書』 印西市教育委員会
 佐藤晃雅 2003『平成14年度 印西市内遺跡発掘調査報告書』 印西市教育委員会
 大澤 孝 2004『千葉県印西市天神台遺跡（第11地点）発掘調査報告書』 印西市教育委員会
 飯島伸一 2004『平成15年度 印西市内遺跡発掘調査報告書』 印西市教育委員会
 日暮冬樹 2014『平成17年度～平成24年度 印西市内遺跡発掘調査報告書』 印西市教育委員会
 鳴田浩司・黒沢 崇 2016『印西市天神台遺跡－主要地方道千葉竜ヶ崎線（印西市大森）事業埋蔵文化財発掘調査報告書－』 千葉県教育委員会
- 12) 注11佐藤2003文献
 天神台呑内遺跡は印旛郡市文化財センターの年報10に全体図が掲載されている（前掲注11）が、報告書は刊行されていない。
- 13) 高木博彦 1974「印西町大森上宿古墳」『ふさ』第5・6合併号 ふさの会
 糸川道行 2003「上宿古墳」『千葉県の歴史 資料編 考古2（弥生・古墳時代）』 千葉県史料研究財団
 野村優子 2008『平成19年度 印西市内遺跡発掘調査報告書』 印西市教育委員会
- 14) 注11飯島2004文献・注11日暮2014文献および
 飯島伸一 2005『平成16年度 印西市内遺跡発掘調査報告書』 印西市教育委員会
- 15) 中山俊之 2016『平成26年度 印西市内遺跡発掘調査報告書』 印西市教育委員会
- 16) 注11日暮2014文献
- 17) 加藤貴之 2008『池ノ下遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
- 18) 大賀 健 1983『印西町稲荷峠遺跡報告書』 稲荷峠遺跡調査会
- 19) 阿部寿彦 1999『東遺跡（第2地点） 馬込遺跡Ⅱ』（財）印旛郡市文化財センター
- 20) 香取正彦・田中 裕ほか 2004『印西市馬込遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 21) 進藤泰浩 1993『駒形北遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター
 仲田鋼太・小牧美知枝 2001『駒形北遺跡（第2地点）』（財）印旛郡市文化財センター
- 22) 野村優子 1999『千葉県印西市駒形西遺跡』 印西市教育委員会
- 23) 駒形南遺跡は駒形北遺跡・駒形西遺跡の南方に位置する遺跡である。これまでに調査はされていないが、奈良・平安時代の集落が存在するとみられる。
- 24) 板橋規子 2001『馬場遺跡（第1地点）・北台塚』（財）印旛郡市文化財センター
 小倉和重 2002『馬場遺跡（第2地点）』（財）印旛郡市文化財センター
- 注14飯島2005文献
 喜多裕明 2011『道作古墳群（第2次）・馬場遺跡第5地点（第1次・第2次）』（財）印旛郡市文化財センター
 注11日暮2014文献
- 25) 注11日暮2014文献
- 26) 花作西遺跡は調査がされていないが、馬場遺跡の北方・北西方にあり、注24小倉2002文献のなかで、奈良・平安時代集落の展開が考えられている。
- 27) 広瀬千絵 2011『天神前遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
- 28) 本稿ではこれらの遺跡群を一つの遺跡とみる場合、駒形北・馬場遺跡と仮称する。
- 29) 印旛郡における郷名と地名の対比については、主として以下の文献を参考とした。
 天野 努 2001「古代房総三国の郡・郷里の変遷と比定地一覧」『千葉県の歴史 通史編 古代2（財）千葉県史料研究財団
 小林信一ほか 2006『研究紀要 25』（財）千葉県教育振興財団
 山路直充ほか 2014『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』 市川市 文化国際部 文化振興課
 ほかにも多くの文献が存在すると思われるが、完璧な把握ができない。失礼の段ご容赦いただきたい。
- 30) 阿部寿彦 1999「神へのまつり」『平成11年度出土遺物展（25周年記念展） 今、古代史がおもしろい－出土文字からさぐる房総の古代－』（財）千葉県文化財センター
 阿部寿彦 2000「設立25周年記念事業 平成11年度出土遺物展【フォーラム】「今、古代史がおもしろい－出土文字からさぐる房総の古代－」講演録『研究連絡誌』第57号（財）千葉県文化財センター
- 31) 『続日本紀』の和同六（713）年五月二日条に、「畿内七道諸国郡郷名著好字」とあり、諸国の国名・郡名・郷名について、好字（良い意味の字）2字を用いるようにとの勅令（諸国郡郷名著好字令）が発せられた。この勅令は「好字二字令」や単に「好字令」とも呼ばれている。
 黒板勝美・国史大系編集会編 1977『続日本紀』前篇 吉川弘文館
- 32) 山路直充 2009「寺の成立とその背景」『房総と古代王権－東国と文字の世界－』 高志書院
- 33) 注17加藤2008文献
- 34) 清宮秀堅 1905『下総国旧事考』
- 35) 注29山路ほか2014文献・注32山路2009文献および
 戸谷敦司 2012「印旛地域の水域変化」『考古学論攷Ⅰ』 千葉大学文学部考古学研究室
 『常陸国風土記』行方郡条における景行天皇巡幸伝説は山路氏や戸谷氏以外にも多くの研究者がとりあげていると思われるが、注29で述べたのと同様に、筆者の力量ではそれ

らのすべてを把握できないことを断っておく。

- 36) 注32山路2009文献
- 37) 内田理彦ほか 1995『千葉県印旛郡本埜村宮内遺跡発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター
- 38) 天野 努 2015「下総国における平安時代前期の開発の様相－旧本埜村角田台遺跡を中心に－」『千葉文華』第43号 創立50周年記念号 千葉県文化財保護協会
- 39) 古代の郡郷の境界は河川や道路などで線状に明瞭な場合もあるが、現代とは異なり、人口密度が少ない地域については、不明瞭な場合や、帯状あるいは共有地の場合なども存在したと想定できる。また当初は中心的な集落の周辺だけが里(郷)と把握された場合が多かったと考える。
- 40) 注17加藤2008文献
- 41) 加藤貴之 2008「古代印旛郡における掘立柱建物群の様相－掘立柱建物の構成から見た居宅・郷家－」『印旛郡市文化財センター 研究紀要6』(財)印旛郡市文化財センター
- 42) 石戸啓夫 2009「所謂火災住居から見直す古代北総の竪穴住居」『扶桑 田村晃一先生喜寿記念論文集(青山考古第25・26合併号)』青山考古学会 田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会
- 43) 川尻秋生 2009「古代房総の国造と在地－印波国造と武射国造を中心に－」『房総と古代王権－東国と文字の世界－』高志書院
- 44) 香取正彦 2006『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅧ－本埜村角田台遺跡(弥生時代以降)－』(財)千葉県教育振興財団
- 45) 川尻氏は村神郷や船穂郷内の遺跡から「(大)生部(直)」や「支部」の墨書が出土することから、印旛郡西方地域については、埜生郡の郡領氏族である大生部直氏と印旛郡の郡領氏族である支部直氏が競合するように開発を行っていたと考察した(注43川尻2009文献)。
なお、「埜生郡酢取郷車持…」の墨書のように、車持氏など他の氏族名もみられるが、様々な氏族も両氏族の影響下にあったのかもしれない。
- 46) 注17加藤2008文献
- 47) 注38天野2015文献
- 48) 山路直充 2014「下総国の郡・郷・里・駅家」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市文化国際部 文化振興課
- 49) 井上尚明 1995「考古学からみた郷家遺跡」『シンポジウム3 地方官衙とその周辺』日本考古学協会茨城大会実行委員会
山中敏史 2003「古代の末端官衙と集落」『大阪府埋蔵文化財研究会(第47回)資料』(財)大阪府文化財センター
- 50) 糸川道行ほか 2007『四街道市小屋ノ内遺跡(3) 物井地区埋蔵文化財調査報告書V』(財)千葉県教育振興財団
- 51) 注4朝比奈2004文献
- 上谷遺跡との比較で小屋ノ内遺跡をみると、小屋ノ内遺跡でも、「コ」の字形配置の掘立柱建物群が所在する台地から一部に小さな谷を介した東方の台地にも規格的な掘立柱建物群が存在する。それらは村落寺院や有力者の居宅を含むとみられるが、「コ」の字形配置の掘立柱建物群を補完する機能もあったと考える。
- 52) 宮内勝巳・阿部寿彦ほか 1993『高岡遺跡群』(財)印旛郡市文化財センター
阿部寿彦 1998「92 高岡遺跡群」『千葉県の歴史』資料編 考古3(奈良・平安時代)(財)千葉県史料研究財団
加藤貴之 2014「高岡遺跡群」『佐倉市史 考古編(資料編)』佐倉市史編さん委員会
加藤貴之 2004「高岡遺跡群の再検討～古代官衙と集落のはざま～」『印旛郡市文化財センター 研究紀要4』(財)印旛郡市文化財センター
および注41加藤2008文献
なお、高岡大山遺跡を含む印旛郡内の奈良・平安時代の有力集落については、上記以外に以下の文献を参考とした。
加藤貴之 2014「印旛郡南部の遺跡」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市文化国際部 文化振興課
小牧美千枝 2014「印旛郡東部と埜生郡の遺跡」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市文化国際部 文化振興課
- 53) 松田富美子ほか 2005『成田市台方下平Ⅰ遺跡・台方下平Ⅱ遺跡発掘調査概報』(財)印旛郡市文化財センター
松田富美子ほか 2007『成田市台方下平Ⅰ遺跡発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター
注3高花・宮1998文献および
部 淳一・宮 文子ほか 1994『千葉県成田市公津東遺跡群Ⅰ』(財)印旛郡市文化財センター
- 54) 田形孝一 2008『《速報》発見! 古代の郷(村)の管理施設－印西市船尾白幡Ⅱ遺跡から古代を探る－』『印西の歴史』第4号 印西市教育委員会
船尾白幡遺跡の遺跡名について触れる。船尾白幡遺跡総体は北側では地続きであるが、南側には支谷が入っている。千葉県教育振興財団の報告では、東側部分と西側部分の遺跡名を分けていないが、田形氏が上記文献で西側部分を「船尾白幡Ⅱ遺跡」とし、小牧美千枝氏もその名称を使用している。筆者は船尾白幡遺跡の報告者の一人であるが、規格的配置掘立柱建物群の存在と意義を考察した田形氏の研究を評価し、本稿では西側部分を「船尾白幡Ⅱ遺跡」とした。
香取正彦ほか 2005『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅦ－印西市船尾白幡遺跡Ⅱ－』(財)千葉県文化財センター
平井真紀子ほか 2014『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXX』(公財)千葉県教育振興財団

- および注52小牧2014文献
- 55) 中山俊之・稲葉千絵 2007『千葉県四街道市 南作遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
天野 努 2008「四街道市南作遺跡の郷長名と人名を記載した墨書土器」『千葉県史料研究財団だより』第19号(財)千葉県史料研究財団
- 56) 木原高弘ほか 2015『酒々井町飯積上台遺跡2・飯積原山遺跡3・柳沢牧墨木戸境野馬土手-酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書4』(公財)千葉県教育振興財団
木原高弘 2016「酒々井町飯積原山遺跡における初期荘園について」『研究連絡誌』第77号(公財)千葉県教育振興財団
- 57) 天野 努 2007「人名記載墨書土器からみた古代房総の地域様相点描-下総国印幡・埴生両郡をめぐって-」『考古学論究-小笠原好彦先生退任記念論集-』小笠原好彦先生退任記念論集刊行会
- 58) 菅原祥夫 1998「陸奥国南部における富豪層居宅の倉庫群-福島県郡山市正直C遺跡・東山田遺跡の分析事例を中心として-」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
- 59) 「郷長」の墨書土器が出土しても、その遺跡を直ちに郷長が住んでいた遺跡としてよいか検討する必要があることを、すでに加藤貴之氏が指摘している。
注41加藤2008文献
- 60) 高橋健一ほか 1979『江原台』佐倉市教育委員会
高田 博ほか 1977『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ-第1次・第2次調査-』(財)千葉県文化財センター
布施 仁ほか 2005『千葉県佐倉市江原台遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 61) 内田理彦 2014「六崎大崎台遺跡」『佐倉市史 考古編(資料編)』佐倉市史編さん委員会
大崎台遺跡に関する文献は多くあり、ここでは省略する。上記文献を参照されたい。
内田理彦 2014「寺崎向原遺跡」『佐倉市史 考古編(資料編)』佐倉市史編さん委員会
渋谷興平ほか 1987『寺崎遺跡群発掘調査報告書』佐倉市寺崎遺跡群調査会
- 62) 大野康男 1991『八千代市白幡前遺跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書V-』(財)千葉県文化財センター
天野 努ほか 1974『八千代市村上遺跡群』(財)千葉県都市公社
- 63) 松田富美子ほか 2008『千葉県佐倉市内田端山越遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 64) 栗田則久 2014「香取地域の遺跡 -小見川地域を中心に-」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市 文化国際部 文化振興課
- 65) 注49井上1995文献
- 66) 栗田則久ほか 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2-流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器時代~奈良・平安時代編)-』(財)千葉県教育振興財団
- 67) 注66栗田2010文献および
栗田則久 2014「コラム 遺跡から見た地域の開発」『佐倉市史 考古編(本編)』佐倉市史編さん委員会
- 68) 注56木原ほか2015文献・木原2016文献
- 69) 注56木原ほか2015文献・木原2016文献
- 70) 小牧美知枝ほか 2014『千葉県印旛郡酒々井町 尾上木見津遺跡(第2・3地点) 千葉県富里市 駒詰遺跡(第2~7・9地点)』(公財)印旛郡市文化財センター
- 71) 注56木原2016文献
- 72) 注56木原2016文献
- 73) 萱田地区遺跡群については、天野努氏や栗田則久氏により、高津馬牧と関係する可能性が指摘されている。下総国には牧があり、時期が降ると私牧の存在も考えられるところから、牧と開拓、牧と荘園遺跡の関係も考慮する必要がある。天野 努 1986「下総国印幡郡村神郷とその故地」『千葉県文化財センター研究紀要10』(財)千葉県文化財センター
栗田則久 2014「遺跡からみた地域の開発」『佐倉市史 考古編(本編)』佐倉市史編さん委員会
- 74) 茜津駅については、柏市根戸周辺とする見解にしたがう。
山路直充 2001「房総の駅路」『千葉県の歴史』(財)千葉県史料研究財団
なお、柏市根戸に「花戸原」という地名があり、「はなとはら」と読まれているが、「かなづはら」と読まれることもあったようである。後者については、「あかねづはら」が転訛したという下記文献の指摘がある。
西嶋定生 2005「下総国内の駅路と於賦駅的位置」『我孫子市史 原始・古代・中世篇』我孫子市教育委員会
- 75) 山路直充 2004「衣河の尻」と「香取の海」『古代交通研究』第13号 古代交通研究会